

氏名(本籍)	いけ がみ よし まさ 池上良正(長野県)		
学位の種類	博士(文学)		
学位記番号	博乙第1,337号		
学位授与年月日	平成9年12月31日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	哲学・思想研究科		
学位論文題目	民間巫者信仰の宗教学的的研究 —青森・沖縄両県を中心に—		
主査	筑波大学教授	Ph. D.	荒木 美智雄
副査	筑波大学教授	文学博士	廣川 洋一
副査	筑波大学教授	博士(文学)	竹村 牧男
副査	筑波大学助教授		棚次 正和
副査	筑波大学教授	博士(文学)	高桑 守

## 論文の内容の要旨

本論文は、青森・沖縄両県に見られる民間巫者の信仰の世界を、日本における「民俗・民衆宗教」研究の視点に位置づけることによって、宗教学的な立場からの考察を試みるものである。論文全体を通して、民間巫者を公正に宗教者として認める宗教学的な視点の重要性が一貫して主張され、長期にわたる「実地調査」によって収集された膨大な一次資料をもとに、巫者たちとそれを取りまく人々（依頼者・信者）によって担われる信念や実践の諸相を、ヌミナス（numinous）な力や意味の次元に支えられた宗教現象として理解することを課題としている。

全体は序章、第1章から第9章までの主論部、および終章から構成され、主論部は2部構成（第1章から第5章までを「第1部 青森県の民間巫者」、第6章から第9章までを「第2部 沖縄県の民間巫者」）としている。

序章では、本論全体の問題関心である〈民俗・民衆宗教〉、具体的な研究対象となる〈民間巫者信仰〉、方法に関わる〈宗教学的な立場〉について、広範な学説史的検討をふまえて、それぞれの意味内容が吟味される。その結果、本論文の中心的な課題は、日常的次元と深く関わりつつ日常的次元からは区別された、「靈威的次元（numinous dimension）」の力や意味に関わる一般生活者の宗教的な生き方の解明にあることが明示され、さらに、「靈威的次元」の力や意味に触発された人々の生の様態は、個々の文化的・社会的・制度的なコンテクストへと開かれた視野の中で理解されるべきこと、などが基本的留意点として提示される。

第1章「民間巫者信仰の諸相」では、津軽地方の「カミサマ系巫者」たちの人生史、依頼者・信者への対応形態、地域住民の支持基盤などが、具体的事例をもとに論じられる。このタイプの巫者たちについての研究の、従来の類型論が批判され、筆者が巫者信仰を支えるものとして作業仮説的に提出する「人の靈性」、「場所の靈性」、「系譜の靈性」などの解釈のモデルに即して、民間巫者による創造的な意味構築過程が明らかにされる。また、同時に筆者が行った一村落の集約的配票調査の結果などから、一般住民層における巫者信仰の支持基盤を実証的に解明している。

第2章「場所の靈性と巫者信仰」では、青森県の民間巫者たちの聖地として知られる下北の恐山と津軽の岩木山を事例に、かかる聖地が近世から近代にかけての時代変化のなかで、教典的・制度的宗教やそれを支配・統轄した政治的権力の強い干渉や規制のもとに、「厳しい弾圧」にもかかわらず、形成展開されたこと、そのような巫者信仰を根底から支える「靈威的次元」の力や意味は、時として世俗的規制を越え得るような持続力を保ち得

たことが、具体的な文書史料や実地調査の資料から描き出される。

第3章「民間巫者の『近代』」では、青森県の代表的地方紙を資料として、明治末期から第二次大戦までの約半世紀間に、国家や社会から厳しい干渉や規制を受けつつ、時代を生き延びた青森県の民間巫者たちの活動が検討される。公の社会の、建前としての「厳しい弾圧」を耐えて、民間巫者を支えた根強い支持基盤や、多岐にわたるかれらの活動が明らかにされている。

第4章「巫者信仰における制度化の葛藤」では、岩木山の赤倉とよばれる巫者信仰の聖地において、中心的役割を果たした巫者の修行堂の集約的な資料収集から、それがひとつの神社として制度的に展開していく過程と、巫者信仰に対する社会的制度や権力による正当化と抑圧の動態的關係などが考察される。

第5章「巫者信仰における救済の諸相(1)」では、主として津軽地方の巫者信仰の具体的事例に依りつつ、巫者と依頼者・信者との間に実現される「救済」の諸相が検討され、民間巫者によって実現される「救済」とは、「宇宙＝生命的」世界像を構成する意味の關係性に生じた歪みや欠陥を感知し、不全な關係を絶ち切るとともに、新たな意味連関を結び直すという、すぐれて創造的な宗教的営為であることが論じられる。

第6章「ユタ的宗教者の基本的性格」では、琉球・沖縄文化圏における巫者信仰の基本的性格が、本論文の第1章と同じ視点から捉え直される。さらに近世の説話に描かれたテーマ群を題材に、かかる基本的性格の歴史的普遍性にも言及している。

第7章「集落社会における巫者消長の動態」では、沖縄本島中部の一村落の事例調査に基づき、昭和初期から現代にいたる村落の変遷過程の中で、民間巫者たちの消長が考察される。「靈威的次元」の力や意味の内に生きることを本領とする民間巫者と、政治的・経済的・社会的保護や規制との関わりが、ひとつの村落社会というミクロな世界に展開される複合・動態として描き出されている。

第8章「巫者信仰における救済の諸相(2)」では、第5章で検討した議論を承け、沖縄地方のユタ的宗教者による救済観の考察を付加することで、さらに問題が掘り下げられる。ユタ信仰を単なる「迷信」や「俗習」とする観点を排し、巫者・依頼者・信者が実現する「救済」に注目し、そこに結び直される豊饒な意味世界が全体的に解明されるとともに、それを取り巻く様々な社会的価値との葛藤の諸相にも目が向けられる。「本土」の巫者との比較も試みられている。

第9章「巫者信仰の現代的展開」では、1980年代以降の沖縄で顕著な展開が見られるキリスト教精霊運動を取りあげ、本論文の主題との関係において、この運動を「民俗・民衆宗教」の研究視角に位置づけ、在来の巫者信仰を支えてきた宗教的表象様態との連続と断絶の諸相が詳細に検討される。

終章では、全体の総括と残された課題の検討を通して、宗教学の立場からモノグラフ研究の重要性があらためて主張される。本論文の基調に一貫して捉えられた〈「靈威的次元」の自律的主導性のうちに生きる宗教者〉という民間巫者の特質が論じられ、「民間巫者」という存在が、様々な歴史的状況を生きた一つの典型的な宗教的人間のモデルとして位置づけられることが結論されている。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、宗教学の視点を一貫して保つことにより、民間巫者信仰の意味世界を一つの自律的な宗教現象として把握することによって、「民俗・民衆宗教」を経典的・制度的宗教や社会の主流の近代主義的な文化から疎外された、劣悪な「迷信」の担い手としてではなく、ヌミナスや力や意味の次元に触発された宗教者として公正に位置づけることに成功しており、宗教研究をより広い地平において進めることに貢献しているという点で、きわめて重要な研究である。

その際、とくに評価されるべきは、著者が(1)多くの巫者、信者（もしくは依頼者）たち、彼らを取り巻く一般住民との、長年に及ぶ、信仰に基づく綿密な実地「調査」によって、新たな資料を示し、巫者に関する従来の諸

研究における平板な類型論的理解を乗り越える洞察が随所で達成されていること、たとえば、「人の靈性」、「場所の靈性」、「系譜の靈性」などの解釈のモデルは、巫者信仰の特色を明らかにするとともに、この個別的現象を超えて世界の多くの民俗・民衆宗教の理解に重要な示唆を提出していることである。さらに、(2)従来の研究において扱われなかった一次資料が豊富に提出されたことである。とりわけ、一般住民の巫者への関わり（第1章）、巫者の聖地岩木山の赤倉における信仰史の展開（第2、4章）、近世の巫者に対する当局の規制（第3章）、沖縄の、ある村落社会における多様な巫者たちの消長（第7章）、キリスト教精霊運動と巫者信仰の連関（第9章）などについて示された資料は、新たな学術的価値を持っている。しかも、(3)それら資料は、単に現象の記述として提出されたのではなく、巫者たちと巫者を取りまく人々のところで生きられた世界観と救済の問題として踏み込んで考察されている。とりわけ、第5、8章で取りあげられた民間巫者信仰の具体的な救済のプロセスに見られる三つの基本的なパターン、すなわち、「運命」、「共振」、「怨念」、あるいは「祓い」と「供養」の複合的ダイナミックス、あるいは、「宇宙＝生命的」世界像の根底に働く「互酬性の倫理」などの命題は、今後の民俗・民衆宗教の研究に有効な手がかりを与えるものであり、高く評価される。

しかしながら、他面で、若干の問題がないわけではない。巫者と巫者を取り巻く人々の宗教的世界の全体的理解を試みるとき、その世界を「信仰」の問題として取りあげることによって、そこに生きられている宗教的世界は、ひとまとめに「靈威的次元」として扱われる嫌いがあるということである。そこに生きられている多様で、豊かな象徴的世界は、大きく脱落しているかに見える。また、長年にわたる「調査」によって獲得された豊富な知識は、資料であるのか、作業仮説的モデルであるのか、著者が読み込んだ意味であるのか曖昧になる傾向がある。はたして、「調査」という態度は、宗教学の課題、すなわち、宗教現象の統合的理解という課題からして充分であるかどうかという疑問が生じる。調査というアプローチが、こちら側から現象への視点であるならば、現象そのものがこちら側に向かって開示するものはどう扱われるのかという問いである。さらには、長年にわたる資料収集の営為が賞賛されるとしても、青森、沖縄の、日本の巫者もしくは、民俗・民衆宗教の世界を取り上げる場合に、本論文において取り組まれていないのは、日本の、そして世界の、多様な巫者や民間宗教の現象との比較論的探求である。その意味でも、本論文は、将来の研究に向けて多くの課題と可能性を抱えている。

以上のような問題点があるとはいえ、青森・沖縄両地方の民間の巫者たちをめぐる宗教的世界を一貫して宗教学の視点から解きあかし、学問的に自律的な宗教的世界をもった宗教者として位置づけた本論文は、その過程で把握した様々なテーマや問題とともに高く評価され、今後の民俗・民衆宗教の研究者にとって必読の研究書となっており、この分野を中心に宗教学一般の進展に貢献するところは大きい。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。